

母娘の共依存がもたらす教育虐待について
——性役割分業と母娘関係——

22191107 田崎百華

本研究では、母娘関係の中で形成される共依存関係が、どのように教育虐待へと発展していくのかについて明らかにすることを目的としている。教育虐待とは、親が子どもの将来を思うという理由から、過度な学業的期待や管理を行い、結果として子どもの心身に大きな負担を与えてしまう行為を指すものである。外から見ると「熱心な教育」や「愛情深い子育て」と受け取られやすいため、虐待として認識されにくい点が大きな特徴である。特に母娘関係では、心理的な距離が近くなりやすく、親の価値観や不安が娘に強く影響する傾向がある。本研究では、このような関係性を「共依存」という概念を用いて整理した。共依存関係では、親が子どもを通して自己価値を確認し、子どももまた親の期待に応えることで自分の存在意義を見出すという相互依存的な構造が作られる。その結果、子どもは「よい子」でい続けることを求められ、自分の気持ちや意思を抑え込むようになる。分析にあたっては、斎藤環（2022）『母という呪縛 娘という牢獄』を主な資料とし、2018年に滋賀県で発生した医学部9浪母親殺害事件を事例として取り上げた。この事件では、母親が娘の医学部合格に強い執着を持ち、それが長期間にわたる過度な学習管理や精神的圧迫につながっていたことが指摘されている。娘もまた、母親の期待に応えなければならないという意識を強く持ち続けており、逃げ場のない関係性の中で追い詰められていったと考えられる。さらに本研究では、教育虐待が家庭内だけの問題ではなく、社会的な背景とも深く結びついている点に注目した。その中で、子どもの学業成果が親自身の成功や安心感と結びつきやすくなり、教育虐待が起こりやすい環境が作られていると考えられる。今回、母娘間の教育虐待と共依存について研究する上で、家庭内の問題であることから個人の問題がかかわってくるかと予想していたのだが、実際には現代における家庭の弱体化や性別役割分業の側面や家庭機能や環境が大きく関わっていて、個人の要因よりも社会全体の要因が多いことから、母娘の問題だけではなくどの家庭でも起こりうる問題として社会全体で考えていくことが必要であると感じた。またお互いに共依存関係から抜け出し自立するためには、母親からの愛情や絆を感じ、娘自身がアイデンティティの確立をすることが呪縛と牢獄からお互いに抜け出す方法であることが分かった。そのために、教育者や学校側ができる対策として、教育現場が「よい子」性育成の場になりすぎないように「自由な子ども」性を伸ばしてあげること、養育者自身が愛情や絆の形成ができていないことも多いため丁寧に話を聞くこと、子どもとの余裕のある関係を築くことなどが挙げられた。現代で弱体化してしまった「家庭」は社会から離れた存在になりがちであり、どの家庭で教育虐待が起きてもおかしくない状態であることから、被虐待者も気づきにくい教育虐待について教育者たちは教育虐待に気づくことができるとも近い存在であり、今後より一層注意を向けていかなくてはならないと考える。